

進級・新入児混合クラスにおける
幼児の仲間関係の形成

大 島 みずき

**Developing peer relationships in the moved
up/newcomer mixed kindergarten class**

Mizuki OSHIMA

進級・新入児混合クラスにおける 幼児の仲間関係の形成

大島 みずき

群馬大学大学院教育学研究科教職リーダー講座

(2019年9月25日受理)

Developing peer relationships in the moved up/newcomer mixed kindergarten class

Mizuki OSHIMA

Program for Leadership in Education, Graduate school of Education, Gunma University

(Accepted on September 25th, 2019)

【Abstract】

This study examined the influence of the kindergarten system on children's peer relationships in a mixed class composed of moved up (kindergartners who were already enrolled in kindergarten the previous year) and newcomer kindergartners, in the first month and six months after start of the kindergarten year. Observing 14 moved up kindergartners and 14 newcomer kindergartners revealed that both groups rarely related to a peer in the first week. Moved up kindergartners related to other moved up kindergartners rather than newcomer kindergartners until the second week. In all observation results, newcomer kindergartners consistently related to other newcomer kindergartners. However, they also tended to relate to moved up kindergartners from the third week. The results reveal that newcomer kindergartners expand peer relationships on the base of newcomer-newcomer relationships.

【問題と目的】

本論文は入園時期の異なる幼児が同数混在する年中クラスにおいて、入園時期が幼児の仲間関係の形成に影響するかを検討するものである。

幼児の仲間関係については、日本でも多く研究が行われている。その中でも及川(2016)は本郷(2001)を元に幼児の仲間関係を「固体能力の変化」と「関係性の変化」の循環的な働きからまとめている。及川(2016)が考えるように、仲間関係の形成や維持

には仲間関係を築く幼児自身の能力やその関係性の変化は重要である。その一方で、幼児の仲間関係は幼稚園や保育園、こども園のような社会の中で形成される。仲間関係が作られる社会がどのような環境の園であるかも、幼児が仲間を作るにあたっては重要だろう。

園の環境の仲間関係への影響

では、幼児の仲間関係に影響を及ぼす園の環境とはどのようなものだろうか。一口に園の環境と言って

もそこには保育形態、保育年数、クラス数、クラス編成、園舎や園庭、保育室の大きさ、入園時期、クラス替えの有無、そして幼稚園、保育園、認定こども園、という施設の違いや国公立、私立の違いなど様々である。

例えば、認定こども園という在籍時間が異なる幼児がクラスの中に混在する園の環境が幼児期の仲間関係に及ぼす影響として、大島（2015）は幼保認定型認定こども園において一号認定の幼稚園籍児と二号認定の保育園籍児が混在するクラスでは、幼稚園籍児が入園して1年以上が経過した年中クラスの8月の段階でも幼稚園籍児は幼稚園籍児を、保育園籍児は保育園籍児と一緒に遊びたい相手として選択しやすい傾向があることを示している。このような仲間関係が作られている理由を大島（2015）は幼稚園籍児と保育園籍児と一緒に過ごす時間の違いから考察している。また、入園時期の異なる幼児が同級となるという園の環境の仲間関係への影響として大島・中澤（2012）は、2年保育児、3年保育児がどちらも在園する幼稚園の年中クラスにおいて、進級児（3年保育児）・新入児（2年保育児）に7月の時点で一緒に遊びたい相手を尋ね、進級児が進級児を、新入園児が新入児を遊びたい相手として選択しやすいことを示している。

さらに、幼稚園における進級時のクラス替えという園の環境が幼児の仲間関係に及ぼす影響として小島（2008）は進級時にクラス替えがある幼稚園において、年中クラスではクラス替えにより、幼児の仲間関係に広がりが見られたことを報告しており、クラス替えがある園環境では、そのタイミングが仲間関係に大きく影響することを示している。

進級・新入児混合クラスの仲間関係

仲間関係を作るにあたって、新入・進級のタイミングは重要である。高橋（2004）は幼児の仲間関係を検討していく中では形成初期に焦点を当てることの重要性を述べている。本研究では大島・中澤（2012）でも取り上げられているような入園時期とクラス編成という園環境の幼児の仲間関係の形成段階への影響を検討する。前述のように大島・中澤

（2012）では、進級・新入園児が混在する年中クラスの7月時点での仲間関係から、入園時期が異なる幼児が同一のクラスに存在するという園の環境が幼児の仲間関係に影響することが示唆されている。しかし、このような園の環境による影響が入園時期の異なる幼児が出会い、仲間関係を形成する4月の段階で見られているのかについては定かではない。

中澤（1992）は3歳時点でクラスの全ての園児が新入園となる園の環境において、幼児の仲間関係の形成を入園後1ヶ月、1週間ごとに幼児の姿を記録した調査から検討している。その結果、幼稚園で過ごす週数が増える中、5週目前後において幼児が孤立している割合が減ることを明らかにしている。さらにこの研究では1ヶ月間の観察に加え入園1ヶ月後にソシオメトリックテストなどを行うことで、初期に孤立している幼児の後の社会的地位評価が低いことなども示しており、3歳の新入園時点の幼児の孤立がその後の仲間関係に影響する可能性を示している。また、謝（1999）は新入園児だけが存在する4歳児クラスという園の環境において、友だちの形成に入園前からの社会的ネットワークが影響していることを示し、「入園前の友だち」が新入児にとって新しい環境への適応を支えるアンカーポイントとしての役割を果たすことを示唆している。このように新入児にとっては入園から友だちと関わりを作っていくことは大きな課題であり、そのため、同一時期に全ての園児と一緒に新入園を迎えるという園環境であれば、以前からの友だち関係などを通して仲間関係が作られていく。

進級児については小島（2008）により、進級児同士の中でのクラス替え後の仲間関係の研究はあるものの、入園時期が異なる幼児の存在の進級当初の仲間関係の影響は示されていない。進級に伴い、新入児が入園してくることは進級児にとっては年少1年間の中で作ってきた友だちとの関係の中に新入児が「仲間入り」してくる状況となる。McGrew & McGrew（1972）は多数派の中に新参加が入る場合、幼児であっても大人同様、周囲の状況を観察したりしながら次第に同化していく様子が示されている。しかし、進級児・新入児が同数で多数派・少数派が

ない場合、幼児はどのように集団を作り始めるのだろうか。高濱・無藤（1997）は進級・新入園児が混在するクラスにおいて、新入児の参入により進級児の既存の仲間関係が不安定になる傾向があることから、進級児の適応という面にも焦点を当てる必要性を述べている。つまり、進級・新入児混合するクラスのスタートはどちらの園児にとっても、大きな仲間関係のゆらぎの時期になるということである。

そこで、本研究では新入児と進級児がどちらも在籍する年中クラスの新学期において彼らの仲間との関わりを記録することで、新入・進級児が一つのクラスに混在するという園環境の仲間関係形成への影響を検討する。さらに、入園から半年後に同じクラスにおいて仲間との関わりを調査することで、4月との違いを検討し、クラスに新入・進級児が混合するという園環境の幼児の仲間関係への影響の持続性についても考えていく。

入園したばかりの3歳児を対象とした中澤（1992）の研究から、4歳児であっても、新入児については入園当初は孤立活動が目立つことが考えられる。しかし、新入児の多くがすでに1年間、他の幼稚園での保育を経験している場合も多いことから、3歳児よりも早い段階、つまり入園1ヶ月ほどで友だちを作ることが可能となることが考えられる。その相手は、大島・中澤（2012）が示す通り、同じ時期に入園してきた新入児となる可能性が高いだろう。さらに、謝（1999）によると4歳児の「入園前から友だち」同士であれば親友関係が10月まで持続するが、「入園前からの知り合い」であればその関係はそれほど長くは持続しないことが報告されている。調査を行う園に年中時点で入園してくる新入児は複数の園からの転園である。そのため新入児同士がお互いを知っている可能性はあるものの、お互いをよく知る仲の良い「入園前からの友だち」である可能性は低いと考える。このことから本調査では新入児は「入園前からの知り合い」である可能性はあると考え、半年後はその関係は持続していないと予測する。

一方、進級児にとって新入児は未知の存在であり、関わり方が分からない相手である。高濱・無藤（1997）が示唆する通り、進級児にとっては新入児

の参入は既存の仲間関係を不安定にするため、進級児にとっても年中クラスへの進級は緊張の大きいものだと予測される。しかし、大島・中澤（2012）で4歳児の7月の時点で進級児は進級児を遊びたい相手として選択しやすい傾向があることから、これまでも見知った進級児との関わりであれば4月の進級当初から見られるのではないだろうか。

子どもが遊びの中で関わるのは同じクラスの子どもだけではない。その他にも保育者や、他のクラスの子ども、他の学年の子どもとも関わる機会はあるだろう。本調査において対象とする園は、1クラスだった年少クラスが年中に進級時点で2つのクラスに分かれ、それぞれのクラスで新入児が進級児と同数所属する形態である。遊びの時間は学年で共通であり、他のクラスとの行き来も容易である。進級児については隣のクラスに、昨年度まで一緒に遊んできた仲間が存在することから、年度開始時点から他クラスの子ども同士での関わるの機会があるのではないかと考えられる。また、新入児については他の園から転園となる幼児のため、異なる園環境の中、入園直後の4月の時点では園に対する不安が高いことが予測される。そのため、新入児はその中で拠り所となる存在として保育者との関わりが多くなるのではないだろうか。

このような根拠から以下の4つの仮説をたて、その検証を行う。

- 仮説1 進級児は4月入園直後の段階から進級児との関わりが多い。
- 仮説2 新入児は4月の入園直後の段階では他児との関わりが少ないが、次第に新入児との関わりが増える。
- 仮説3 進級児は初めの段階から他のクラスの子どもとの関わりが多い。
- 仮説4 新入児は保育者との関わりが多い。

【方 法】

調査協力児 A幼稚園 年中1クラス28名(進級・新入児構成：進級児14名、新入児14名、性別：男児16名、女児12名)。

調査時期 201X年4月第2週—第4週の金曜日、同年10月第1週の金曜日。

調査材料 記録用紙、クラス名簿、ビデオカメラ2台。

調査者 調査協力児の入園時期（進級/新入）の情報を持たない大学教員、及び大学で教育心理学を専攻する学生が各調査日ごとに2名で実施した。

調査方法 入園直後の3歳児の仲間関係を調査した中澤（1992）の調査方法を参考に、幼児が自由に活動する姿についての20秒間映像で記録を1日で複数蓄積し、その間幼児が関わっている相手を記録した。

調査手順 幼児がおもいおもいに遊んでいる場面において撮影を行なった。調査を行なった園では、幼児は8時40分の登園後、荷物を各児の所定の場所におき、すぐに各々好きな遊びを始める。本調査では調査協力児が自分の遊びを始める時間、そして調査者が幼児の特徴を記録し、調査を行う準備ができる時間を考慮し、9時を記録開始時間と設定した。

登園からおおよそ20分後から可能な限り名簿の順に幼児の様子を20秒ずつビデオカメラで撮影した。撮影の際はターゲットとなる幼児だけでなく、その幼児が誰と関わっているのかわかるように撮影することを心がけた。また、幼児がビデオカメラに気を取られすぎることがないように、撮影者は幼児と距離をとって撮影を行なった。それぞれの調査協力児について2-3回の記録を行い、4日間の撮影で20秒間の記録を1単位とする309の記録を得た（1週目63、2週目84、3週目81、10月81）。なお、記録を最初に行った1週目については、幼児が初めて園で自由遊びを行った日であり、自由に遊べる時間が限られていたため、他の週よりもデータ数が少なくなっている。

【結 果】

記録の分類方法

得られた記録について、それぞれの単位でターゲットとなる調査協力児と20秒間の間に関わりが見られた相手を記録した。さらに関わりが見られた

相手が見られた場合その人数に関わらず、進級児・新入児・その他の子ども、保育者との関わりが見られたとして扱うこととした。全ての相手との関わりが見られなかった幼児については関わりなしとした。なお、本調査では「関わり」を自分から話す、触る、追いかける、相手から話しかけられる、触られる、追いかけられるという行動から捉えた。そのため、集団の中に存在するように見えてもこれらの行動をしていない場合は「関わりがない」として分類された。分類は調査者1名により行われたが、分類が難しい場面については撮影者、担任との協議の上で分類を決定した。

関わりが見られた幼児の数について

記録時間内で関わりが見られた幼児の数について、1単位あたりの平均値を幼児の入園時期、及び調査時期ごとに算出した（表1）。入園時期（進級・新入）、調査時期（1週目、2週目、3週目、10月）を被験者間要因とする2要因の分散分析を行なった結果、時期の主効果($F(3,285) = 10.25, p < .01$)、及び入園時期×調査時期の交互作用($F(3,285) = 2.84, p < .05$)が有意であった。時期の主効果については多重比較の結果、1週目に関わりが見られた平均人数が他の時期に比べ少ないことが示された（Bonferroni, $ps < .01$ ）。交互作用については、進級児は関わり合いのある人数について1週目と2週目（Bonferroni, $p < .10$ ）に差がある傾向が、そして1週目と10月（Bonferroni, $p < .05$ ）に有意な差が見られ、3週目、10月の方が1週目よりも関わりが見られた人数が多かった。一方、新入児は、1週目と3週目、1週目と10月、2週目と3週目で関わりが見られた人数に有意な差が見られ（Bonferroni, $ps < .05$ ）、1週目よりも3週目、10月に関わりが見られた人数が多く、さらに2週目よりも3週目に関わりが見られた人数が多かった。また、3週目においては新入児の関わりが見られた人数が進級児の関わりが見られた人数よりも有意に多かった（Bonferroni, $p < .05$ ）。

幼児同士の関わりの有無

記録単位ごとに他児との関わりの有無を分類、集

表1 時期別関わりが見られた幼児の数

	4月			10月
	1週目	2週目	3週目	
進級児	.45 (.51)	.98 (.87)	.92 (.70)	1.13 (1.04)
新入児	.34 (.58)	.79 (.88)	1.45 (1.01)	1.00 (1.01)
全体	.40 (.58)	.88 (.88)	1.20 (1.01)	1.06 (1.01)

() 内はSD

表2 時期別に見た他児との関わりのおも

	1週目		2週目		3週目		10月	
	進級児	新入児	進級児	新入児	進級児	新入児	進級児	新入児
関わりあり	16 (.48)	9 (.28)	29 (.69)	23 (.55)	27 (.69)	30 (.71)	32 (.75)	28 (.71)
関わりなし	15 (.52)	23 (.72)	13 (.31)	19 (.45)	12 (.31)	12 (.29)	10 (.25)	11 (.29)
合計	31 (1.00)	32 (1.00)	42 (1.00)	42 (1.00)	39 (1.00)	42 (1.00)	42 (1.00)	39 (1.00)
	$\chi^2(1)=2.74, p<.10$		$\chi^2(1)=1.28, n.s.$		$\chi^2(1)=.05, n.s.$		$\chi^2(1)=.20, n.s.$	

表3 時期別に見た進級児との関わりのおも

	1週目		2週目		3週目		10月	
	進級児	新入児	進級児	新入児	進級児	新入児	進級児	新入児
関わりあり	9 (.29)	3 (.09)	15 (.36)	4 (.10)	8 (.21)	4 (.10)	22 (.52)	18 (.46)
関わりなし	22 (.71)	29 (.91)	27 (.64)	38 (.91)	31 (.79)	38 (.91)	20 (.48)	21 (.54)
合計	31 (1.00)	32 (1.00)	42 (1.00)	42 (1.00)	39 (1.00)	42 (1.00)	42 (1.00)	39 (1.00)
	$\chi^2(1)=3.95, p<.05$		$\chi^2(1)=8.23, p<.01$		$\chi^2(1)=1.94, n.s.$		$\chi^2(1)=.31, n.s.$	

計し、入園時期（進級・新入）の偏りを調べるための χ^2 検定を時期別に行った（表2）。その結果、1週目において、有意な偏りが見られる傾向が示された。残差分析の結果、進級児よりも新入児の方が他者との関わりがない場合が有意に多いことが示された（ $p<.05$ ）。2週目、3週目、10月では有意な偏りは見られなかった。

同じクラスの幼児同士の関わり

進級児との関わりのおも 記録単位ごとに進級児との関わりのおもについて分類、集計し、入園時期の

偏りを調べるための χ^2 検定を時期別に行った。結果、1週目、2週目において有意な偏りが示された（表3）。残差分析の結果、新入児と進級児の関わりが見られた場面に比べ、進級児が進級児と関わりが見られた場面が有意に多いことが示された（ $ps<.05$ ）。3週目、10月では有意な偏りは見られなかった。

新入児との関わりのおも 記録単位ごとに新入児との関わりのおもについて分類、集計し、入園時期の偏りを調べるための χ^2 検定、及び直接確率検定を時期別に行った（表4）。その結果、全ての時期で有意な偏りが示された。進級児と新入児の関わりが

表4 時期別に見た新入児との関わりの有無

	1 週目		2 週目		3 週目		10 月	
	進級児	新入児	進級児	新入児	進級児	新入児	進級児	新入児
関わりあり	0 (.00)	6 (.19)	2 (.05)	19 (.45)	4 (.10)	25 (.60)	12 (.29)	18 (.46)
関わりなし	31 (1.00)	26 (.81)	40 (.95)	23 (.55)	35 (.90)	17 (.40)	30 (.71)	21 (.54)
合 計	31 (1.00)	32 (1.00)	42 (1.00)	42 (1.00)	39 (1.00)	42 (1.00)	56 (1.00)	52 (1.00)
直接確率検定		$p < .05$	$\chi^2(1) = 18.35, p < .01$		$\chi^2(1) = 21365, p < .01$		$\chi^2(1) = 2.68, p < .10$	

表5 時期別に見た他のクラスの子どもとの関わりの有無

	1 週目		2 週目		3 週目		10 月		
	進級児	新入児	進級児	新入児	進級児	新入児	進級児	新入児	
関わりあり	6 (.19)	1 (.03)	16 (.38)	5 (.14)	18 (.46)	9 (.21)	6 (.14)	5 (.13)	
関わりなし	25 (.81)	31 (.97)	26 (.62)	37 (.86)	21 (.54)	33 (.79)	36 (.86)	34 (.87)	
合 計	31 (1.00)	32 (1.00)	42 (1.00)	42 (1.00)	39 (1.00)	42 (1.00)	42 (1.00)	39 (1.00)	
		$\chi^2(1) = 4.20, p < .05$		$\chi^2(1) = 7.68, p < .01$		$\chi^2(1) = 5.56, p < .05$		$\chi^2(1) = .04$ n.s.	

表6 時期別に見た保育者との関わりの有無

	1 週目		2 週目		3 週目		10 月		
	進級児	新入児	進級児	新入児	進級児	新入児	進級児	新入児	
関わりあり	3 (.10)	5 (.16)	7 (.17)	4 (.10)	5 (.13)	3 (.07)	3 (.07)	3 (.08)	
関わりなし	28 (.90)	27 (.84)	35 (.83)	38 (.91)	34 (.87)	39 (.93)	39 (.93)	36 (.92)	
合 計	31 (1.00)	32 (1.00)	42 (1.00)	42 (1.00)	39 (1.00)	42 (1.00)	42 (1.00)	39 (1.00)	
		$\chi^2(1) = .50, ns.$		$\chi^2(1) = .94, n.s.$		$\chi^2(1) = .73, ns.$		$\chi^2(1) = .01, n.s.$	

見られた場面に比べ、新入児が新入児と関わりが見られた場面が全ての時期で有意に多いことが示された。

クラス成員以外との関わり

他のクラスの幼児との関わりの有無 記録単位ごとにその他の関わりの有無について分類、集計し、入園時期の偏りを調べるための χ^2 検定及び直接確率検定を時期別に行った(表5)。その結果、4月の時点では有意な偏りが示された。残差分析の結果、4

月の時点では新入児がその他のクラスの幼児と関わる場合よりも進級児がその他の子どもと関わる場合が有意に多いことが示された($p < .05$)。

保育者との関わりの有無 時期別に保育者との関わりの有無について分類、集計し、入園時期の偏りを調べるための χ^2 検定を時期別に行った(表6)。その結果、全ての時期で有意な偏りは見られなかった。

【考 察】

仮説の検証

進級児の友だちとの関わり 本研究では進級児はすでに1年間年少として園での生活を体験していることなどから、4月の進級の時点からすでに見知った友だちと遊び始めると予測した。しかし、調査の結果から、進級児の関わりが見られた幼児の数は1週目の人数は3週目、10月の人数よりも少ないことが示された。一方で、1週目の幼児との関わりの有無については関わりが見られた幼児の割合は新入児の関わりが見られた幼児の割合よりも多かった。進級児が進級児と関わる割合は新入児が進級児と関わる割合よりも1週目、2週目で多く、さらに進級児が新入児と関わる割合は新入児が新入児と関わる割合よりも1週目から10月にかけて継続して低いことが示された。このことから仮説1「進級児は初めから進級児との関わりが多い」は、進級児が進級児との関わりが多いという部分のみ支持されたとと言える。

本研究の予測に反し、進級児が新入児と同様に1週目についても関わりが見られた人数が少なかったことについては、高濱・無藤（1997）が示すように、進級児にとっても新入児がいるということがこれまでの仲間関係を不安定にさせる要素となっていたことを意味するだろう。しかし、新入児よりは幼児同士の関わりが見られない割合が少ないことから、1週目であっても進級児がひとりぼっちとなることは少ない可能性が伺えた。

また、先行研究（大島・中澤、2012）同様、進級児同士の関わる割合は多かったものの、新入児が進級児と関わる割合との間に有意な偏りが見られたのは2週目までであった。このことからすでに園での基盤ができている進級児にとっては同じクラスの進級児同士の関わりにとらわれず、3週目以降は関わる相手が広がりを見せている様子が伺えた。

新入児の友だちとの関わり 新入児については初めての環境で友だち関係を作るのに少し時間がかかるため、4月の段階では他児との関わりは少ないと予測した。新入児の入園当初の他児との関わりについ

ては、関わりが見られた幼児の数についての結果から、新入児は3週目、10月よりも1週目、3週目よりも2週目で関わりがある幼児の人数が少なかった。さらに、他児との関わりの有無についても、1週目でのみ関わりが見られない場合が進級児と比較しても多かったこと、さらに、この傾向が2週目以降、見られなくなることが示された。また、2週目以降についても新入児が新入児と関わりがある場合は進級児が新入児と関わる場合よりも有意に多いこと、そして新入児が進級児と関わる割合は進級児が進級児と関わる割合よりも有意に少ないことが示された。このことから仮説2「新入児は初めの段階では他児との関わりが少ないが、次第に新入児との関わりが増えてくる」については、概ね支持されたとと言える。

4月の新入児同士の様子から、新入児は自分と同じ環境にある新入の子ともと関係を作り始めることから幼稚園生活を初めていく様子が伺えた。さらに、10月に入っても新入児が新入児と関わる割合は新入児が進級児と関わる割合よりも多いことから、新入児同士の関わりは半年後までは継続し、新入児が新しい幼稚園での生活を送る上での基盤となる可能性が示唆された。一方で、新入児が進級児と関わる割合が3週目以降、進級児同士の関わりとの割合と差が見られなくなることから、新入児は新入児同士の関わりを維持しながら、その安定の中で進級児との関わりも発展させていると考えられる。

他のクラスの子どもとの関わり 進級児については隣のクラスに年少の時の友だちがいるなどの理由で、進級当初から他のクラスの子どもとの関わりが多いことを予測した。進級児が他のクラスの子どもと関わりをもつ割合は、新入児が他クラス児と関わりを持つ割合よりも1週目から3週目にかけて多いことが示された。このことから仮説3「進級児は初めの段階から他のクラスの子どもとの関わりが多い」は支持された。

一方で、10月には他クラス児と関わりがある割合につて、入学時期の差は見られなくなっている。調査を行なった園は、年中2クラスについては園庭、保育室を含め遊び場所にクラスによる制限はなく、10月の調査時には隣の保育室で遊ぶ子どもの姿も

見られた。新入児は、新入児同士の関係の中で進級児と関係を持ち始め、さらに、一緒に遊ぶ経験を積み重ねる中で、隣のクラスの子どもたちとの関わりも少しずつ形成していくのだろう。

保育者との関わり 本研究では、入園当初不安の多い新入児は保育者と関わる人が多いと予測したが、進級児と新入児に保育者との関わりが見られた割合に差は見られず、さらに1週目も保育者との関わりが見られた割合が進級児で10%、新入児で16%と決して多くはなかった。

調査を行う中で、保育者のそばにいる子どもは固定している傾向が見られた。調査を行なったクラスの保育者には友だちと遊ぶことで園での楽しさを感じて欲しいという願いが進級・入園当初からあり、できる限り遊びの中で子ども同士の関わりを後押ししている様子が見られた。また、進級児については、同園での年少時、新入児については転園前の幼稚園で、すでに保育者との関わることを経験していること、またその発達段階から、保育者が直接関わっていない場合でもその存在を感じられることで不安を感じることは少なかった可能性が考えられる。

総合考察

進級・新入児混合クラスの4月当初の仲間との関わりから、年中クラスに進級・新入児が混合するという園環境の影響を検討することを目的として本研究を行った結果、進級・新入という入園時期が異なる園児がいるという環境は新入児にとっては少なくとも半年後までは影響を及ぼしている可能性が示唆された。

進級児は進級から2週目以降、進級児同士の関わりにそれほど限定されることなく隣のクラスも含め仲間関係を広げながら遊んでいることが示された。新入児については新入児同士の関わりが多い傾向は10月まで維持される一方で、進級児や隣のクラスの幼児との関わりも3週目以降徐々に増えて行く様子から、新入児が新入児同士の仲間関係を基盤として仲間関係を広げて行く様子を伺うことができた。

本研究では進級・新入混合クラスの年中を対象としたが、上記のような傾向は年中クラスに限ったも

のではなく、在園期間などが異なる幼児が同一クラスに存在する園環境では共通することが考えられる。例えば、年少段階で3歳未満児のクラスからの進級、そして年少からの新入児が混合するクラスが存在する認定子ども園においても同様の傾向が見られるのではないだろうか。実際、先行研究(大島, 2015)では認定こども園の年中段階においても、3歳より前に入園した保育園籍児は保育園籍児、3歳で入園した幼稚園籍児は幼稚園籍児を遊びたい相手として選びやすい傾向があると示されている。新入児が新入児同士の関わりから仲間関係を広げる可能性を示唆した本研究の結果は、入園時期のことなる園児が混在する園環境において、保育者が幼児の仲間関係形成の援助を行う際の一助になるかもしれない。

本研究の限界と今後の展望

本研究では進級児の年少時点、そして新入児の入園前の仲間関係までは考慮に入れることができなかった。実際、調査後担任保育者より今回見られた新入児同士の関わりが同じ幼稚園の出身者であった場合もあることを教えていただいた。謝(1999)においても、入園前にお互いを知っていたかがその関係の深さも含め環境移行後に仲間関係を予測する要因になることが指摘されている。同様に、進級児については小島(2008)が示すとおり、年少時にどのような仲間関係を構築していたのかも重要だろう。

また、本研究は進級・新入児混合の1つのクラスのみを対象とし、記録したわずかな時間を分析して行なった研究である。さらに多くの園、クラスでより長期的・縦断的な調査を行うことで結果の一般化を行う必要があるだろう。また、調査対象児を増やすことで、性差等他の要因の影響も検討していかねばならない。また、先述したように、認定こども園のように年少時点において進級・新入児が在籍するクラスについても同様の調査を行うことで、本調査において見られた園環境の仲間関係への影響の結果が幼児期全般についてのものなのかについても今後検討していく必要があるだろう。

引用文献

- 本郷一夫 (2001). 保育の場における仲間関係を規定する要因：刑部論文によって刺激されるもの. 発達心理学研究, 12, 60-62.
- 小島康生 (2008). 進級によるクラス替えに伴う環境移行が幼稚園児の仲間関係に及ぼす影響—仲の良いお友達の存在が関係の広がりにもたらす効果とその個人差—. 中央大学心理学研究科・心理学部紀要, 8, 1-15.
- 及川智博 (2016). 幼児期における仲間関係に関する研究の動向：固体能力論と関係論の循環の先へ. 北海道大学大学院教育学研究紀要, 126, 75-99.
- McGrew, P. L., & McGrew, W. C. (1972). Changing in children's spacing behavior with nursery school experience. *Human Development*, 15, 359-372.
- 中澤 潤 (1992). 新入幼稚園児の友人形成：初期相互作用行動, 社会認知能力と人気, 保育学研究, 30, 98-106.
- 大島みずき (2015). 幼保連携型認定こども園における幼児の仲間関係. 田園調布学園大学紀要, 10, 211-219.
- 大島みずき・中澤 潤 (2012). 幼稚園進級児・新入園児混合クラスにおける仲間関係の縦断的变化. 千葉大学教育学部研究紀要, 60, 115-119.
- 高濱裕子・無藤 隆 (1997). 移行期の仲間関係—新入園児の参入にともなう進級児の相互作用の変化—. 日本家政学会誌, 48, 279-287.
- 高橋千枝 (2004). 新入延期の仲間関係における相互作用内容の変化に関する研究. 東北大学大学院教育学研究科紀要年報, 53, 267-275.
- 謝 文慧 (1999). 新入幼稚園児の友だち関係の形成. 発達心理学研究, 10, 199-208.

付記

本論文は日本発達心理学会第29回大会において発表したものを加筆, 修正したものである。

謝辞

本研究に快くご協力いただいた幼稚園の園児, 及び先生方に心よりお礼申し上げます。また, 群馬大学教育学部の本多麗奈さん, 吉成光さんには園での記録にご助力いただきました。論文の執筆にあたっては植草学園大学 中澤潤教授にご助言いただきました。感謝申し上げます。

